

長瀬高浜遺跡 III

天神川流域下水道事業に伴う

砂丘遺跡の発掘調査概報 (2)

1980

財団法人 鳥取県教育文化財団

序　　言

北条砂丘は、国道9号線や国鉄山陰線を走る自動車や列車の車窓からは、緑あざやかな農地として旅人の目を楽しませてくれる。その東端に、住民にはなくてならぬ下水処理場が建設されることになった。予定地には埋蔵文化財包含地があり、やむを得ず発掘調査を開始して3年目もここに終ろうとしている。当初皆目わからなかった遺跡も、白砂下からあらわれた黒砂層や黒砂を盛った古墳の出現により活気を帯びてきた。今年度は黒砂層の中に85棟もの家屋群があらわれ、古代の大集落があることがわかり、なおかつ古墳・石棺墓・土壙墓等の墳墓が新たに13基発見された。ブドウやラッキョ畑の下に古代の大村落がねむっていたことは、今後の考古学・古代史・地理学等に大きな影響を与えると思われる。今年度の調査を無事終えるにあたり、調査関係者の並々ならぬ御努力に感謝するとともに、ここにささやかながら本書を概報としておおくりする次第である。

昭和55年3月

鳥取県教育文化財団常務　木　村　耕　造

例　　言

本書は、天神川流域下水道事業にともなう埋蔵文化財発掘調査の、昭和54年度の調査概報である。財団法人・鳥取県教育文化財団が県土木部下水道課の依頼をうけて発掘調査を実施した。期間は昭和54年4月9日から昭和55年3月31日である。

調査の実施にあたっては、鳥取県教育委員会文化課の指導をうけ、各大学・研究機関の考古学専門家の視察等による助言・協力を得た。

昭和53年度調査の1号墳は、移転保存を行った。このため奈良国立文化財研究所・沢田文部技官の指導を得、工事の実施にあたっては保存科学研究会に依頼した。出土鉄器については元興寺文化財研究所、銅器については上記奈良国立文化財研究所に処置を行っていただいた。記して感謝の意とします。

本書は、教育文化財団の調査員・補助員全員による協力で作成した。研究ノートについては執筆をしておくが、これも全員の協力の上に成り立ったものである。

調査にあたり多くの方々から助言・協力を得た。主な方々について記して感謝したい。石井清司、石野博信、池田次郎、泉森 皎、宇野 栄、卜部吉博、小田富士雄、瀧田雅昭、小嶋芳孝、川原和人、勝部 衛、加古千恵子、北村富美子、楠之哲夫、久保穂二朗、小原貴樹、後藤 直、真田広幸、佐原 真、沢田正昭、鹿田安信、杉谷愛象、杉谷政樹、田中 琢、武末純一、高野信雄、高野正昭、千賀 久、土井吉人、中井一夫、名越 勉、中野知照、長友恒人、西谷 正、浜石哲也、平川 誠、福尾正彦、堀田啓一、町田 章、正岡睦夫、村上 勇、本村豪章、森 浩一、森下哲也、柳沢一男、山崎純男、安川豊史



素文鏡



銅鏃



石製模造鏡



鐵鏟



玉類



釣針



古錢



劍先形鐵品



挿図 I 長瀬高浜遺跡と周辺遺跡

遺跡地名

1. 長瀬高浜遺跡
2. 和助北遺跡
3. 馬ノ山古墳群
4. 南谷遺跡
5. 乳母ヶ谷遺跡
6. 宮内孤塚古墳
7. 倭文神社（伯耆一の宮経塚遺跡）
8. 久見庵寺
9. 北山1号墳
10. 長和田・津浪遺跡
11. 門田遺跡
12. 闕ヶ坪遺跡
13. 大平山古墳群
14. 溝口遺跡



写真 I 長瀬高浜遺跡航空写真



挿図2 長瀬高浜遺跡内黒砂分布図

第一章 長瀬高浜遺跡の立地

長瀬高浜遺跡は、鳥取県東伯郡羽合町長瀬字高浜にあります。羽合町は、日本海岸に面した鳥取県下中部の面積12.41km²、人口6,783人の小さな町です。町の北側は日本海に沿って北条砂丘が東西につながり、東端は橋津川に至る。橋津川の東には御冠山からびてくる馬ノ山丘陵が海岸線までせまるが、その尾根上には全長110m（推定）の馬ノ山4号墳をはじめとする22基の古墳で形成される馬ノ山古墳群があります。ちょうどこの古墳群が作られた古墳時代前期後半～中期前半（4C後～5C前）にかけての大集落が、橋津川の西の北条砂丘の砂丘下からあらわれました。砂丘の白砂の下からあらわされた黒砂を掘って作られた竪穴住居跡75棟、掘立柱建物跡10棟の集落は、長瀬高浜遺跡のほんの一部で、その全域の解明は今後の調査に待たれます。



写真2 馬の山4号墳（南から）



写真3 集落跡発掘調査風景

第2章 長瀬高浜遺跡の調査経過

1. 遺跡の発見

昭和49年5月、鳥取県教育委員会の行った国道9号線北条バイパス建設にともなう現地での分布調査で、高浜の砂丘地に多量の土器が落ちていることがわかり、その地域に「天神川流域下水道事業 天神浄化センター」が建設予定されることから調査の必要性がおこりました。

2. 試掘調査（昭和52年度）

試掘調査は8月から開始された。調査は財団法人鳥取県教育文化財団が行い、経費は鳥取県土木部下水道課の委託費によった。調査対象地は、施設用地10haのうちの第一期工事予定地分約5haとした。調査方法は、 5×5 、 5×10 、 10×10 mのグリットを32ヶ所、計3,000m²にわたり掘り下げた。砂丘地の発掘は、表面10

$\times 10$ mのグリットも、地表下7m掘り下げると 1×1 mの面積にせばまり、一部には機械力にたよった所もある。結果は古墳1基、箱式石棺6基、中世火葬墓25基をはじめとして多数の弥生土器、土師器をみつけたため、53年度への本調査に引きつがれました。

3. 昭和53年次本調査

試掘調査の結果にもとづき、関係部局との協議が行われたが計画変更は不可能とされ、遺構・遺物を含む黒砂面の全面発掘調査が実施された。そのうち調査したものは上記の試掘調査発見の遺構と、東部黒砂面、並びに中央管理棟建設用地内の下層から発見された五輪塔群を含む黒砂面です。1号墳の箱式石棺からは刀剣とともに30~40歳の女性の遺骸があらわれ、調査関係者のみならず町内の人々を驚かせました。

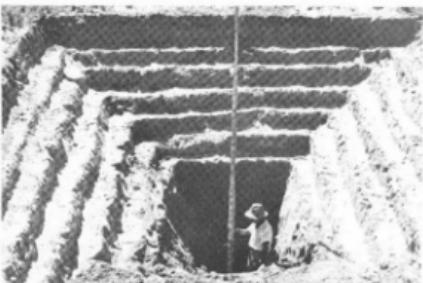


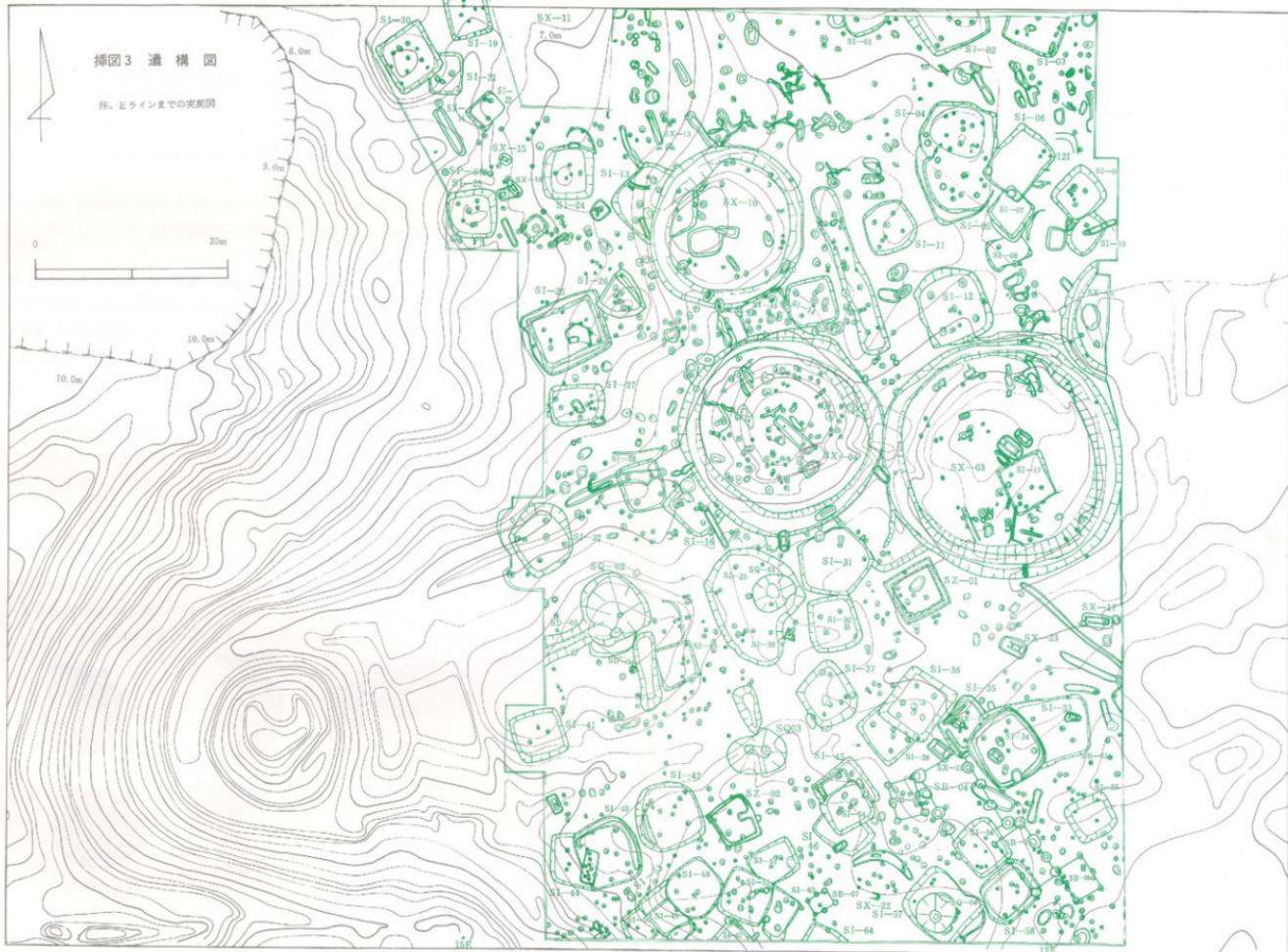
写真4 試掘調査中

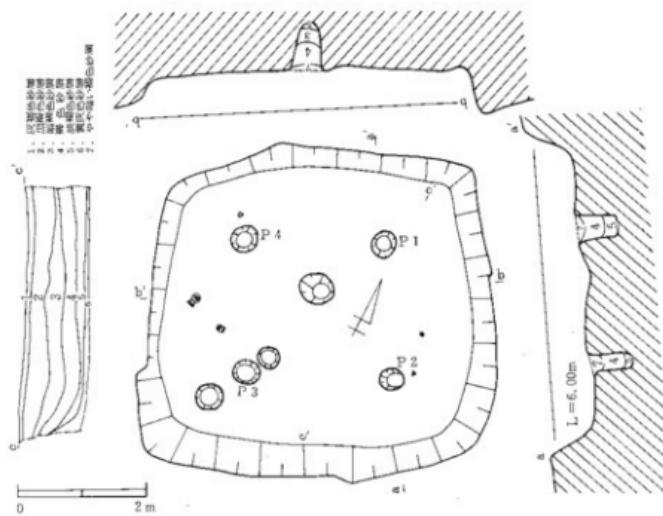


写真5 1号墳全景

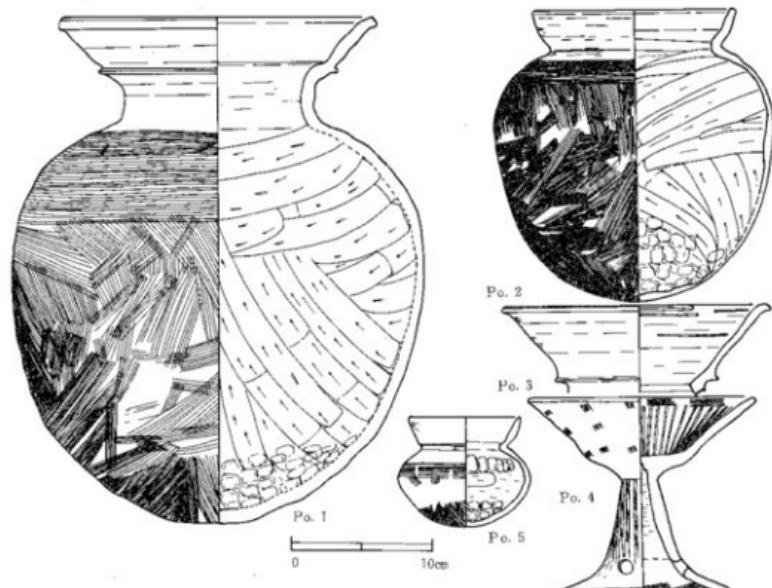


写真6 黒砂層発掘中





插図4 S III遺構図



插図5 S III遺物図

第3章 昭和54年度の発掘調査の結果

54年度は、工事の第1系列の南北200m、東西50mの区画内1万m²の黒砂面について全面発掘調査を行った。調査した主な遺構は竪穴住居、掘立柱建物、祭祀跡、古墳です。

I. 竪穴住居跡 (S I)

竪穴住居跡は調査区の北側平坦面で75棟をみつけた。内わけは弥生時代前期（円形プラン）1棟、古墳時代前期後半～中期前半（方形プラン）74棟です。

(1) 竪穴住居跡 S I 11 (挿図4・5、写真7・8)

S I 11は12 I 地区の北西部に位置し、S I 05の南西、S I 26の北西に存在します。平面プランは隅丸方形で、床面は長辺で4.78m、短辺で4.28m、壁の高さは南側で0.68m、北側で0.52mです。床面積は20.5m²で、その周辺には側溝は認められなかった。柱穴は4穴が確認され、P 1から順に(36×40—62)・(36×34—64)・(26×36—69)・(40×42—75)cmを測る。床面の中央には特殊ピット(54×48—76)cmが配されています。

遺物は、壺・甕・高杯・器台・小型丸底壺などが出ています。

壺(P 0 1)は、斜めに開く複合口縁で、端部でやや外反し、底部は丸底です。

甕(P 0 2)は、口縁端部でやや内湾し、頸部内面にはヘラ削りの痕がみられます。

器台(P 0 3)は、受部の口縁端部が外反して終り、外面はナデ仕上げ、内面はヘラ削りののちヘラ磨きで仕上げています。

高杯(P 0 4)は、杯部が杯底部から杯上部に接続する部分で角張り、甘い稜をなしています。杯内面は、ハケ目後放射状の暗文が施されています。

小型丸底壺(P 0 5)は、内湾気味に開く口縁をもち、肩部が張り、頸部には磨きが施されています。外面はハケののち横ナデで消し、内面はヘラ削りの後指頭圧痕がみられます。

これらの遺物から、S I 11は古墳時代前期末（青木屋新）と考えられます。



写真7 S I 11 (北から)



写真8 S I 11出土遺物

(2) 穫穴住居跡 S I 41 (挿図 6・7)

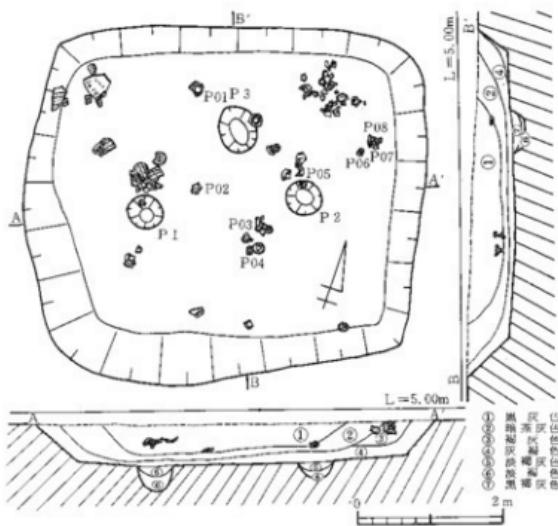
14G、14F 地区の境で、
住居跡 S I 42~44 の北西、
溝状遺構 S D 03 の南に位
置します。

平面形は方形で、東西
辺 5.50m、南北辺 4.76m
を測る。床面は南東から
北西方向へわずかに傾く。
床面の東西辺は 4.52m、
南北辺 3.92m で、深さは
南西隅で最大値 62cm、北
東隅で最小値 41cm を測る。
床面積は約 17.7m² です。
側溝はみられない。ピッ
トは 3 個を数えるが、北

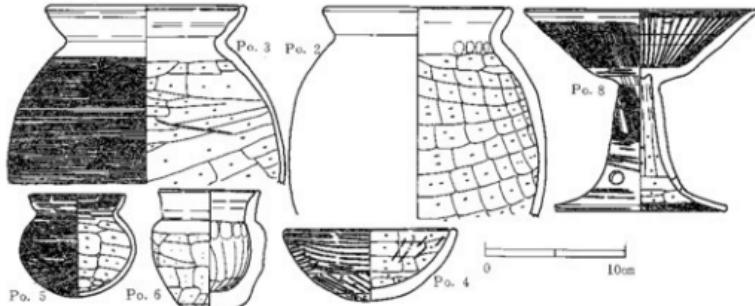
側のピットはやや浅く黒

褐色砂がつまっており、柱穴と考えるよりは位置的に特殊ピットと考えた方がいい。構造柱のピットは東西に並んだ 2 個だけで、2 本柱の建物と考えたい。ピットプランは P 1 から (25×23-18) (25×22-15) (30×25-10) cm です。

遺物は、多量の土師器を出土したが、その総量はコンテナ 9 箱分になる。主なもの実
測図は甕 (P O 2・3)、高杯 (P O 8)、小型丸底壺 (P O 5・6)、椀 (P O 4) です。これら
の土器から S I 41 の時期は古墳時代中期初頭 (青木Ⅲ古) と考えられます。



挿図 6 S I 41 遺構図



挿図 7 S I 41 遺物図

2. 掘立柱建物跡（S B）

掘立柱建物跡は調査区北側平坦面の南東側で10棟みつかった。2×3間1棟、1×4間1棟、1×3間1棟の他はすべて1×2間です。S B 08以外は古墳時代前中期です。

(1) 掘立柱建物跡 S B 02 (挿図8、写真11)

11Fの南西グリットの西北に位置し、S I 55の南で、S B 05とはP 6で切り合う。切り合いの前後関係はわからなかった。主軸は北西—南東軸で、梁間1間、桁行2間の建築物です。桁行長4.0m、妻通長3.1mを測り、床面積は12m²です。柱穴はP 1～6を数える。各柱間距離はP 1から、1.48、1.26、1.33、1.23mを測る。柱穴底の絶対高はP 1から4.75、4.62、4.79、4.70、4.67、4.60mを測り、その差はわずか19cmです。各柱穴プランはP 1より(43×47-50)(53×51-56)(68×70-65)(53×70-58)(47×41-49)(100×80-56)cmです。少量の遺物からS B 02の上限は古墳時代中期初ごろです。

3. 祭祀遺跡

長瀬高浜遺跡では、集落遺跡から出土する遺物では考えられないような特殊な遺物が目についた。特に15I地区のI d区のピット周辺での出土遺物から祭祀遺跡を考えてみたい。

(1) 祭祀遺跡 S P 01 (挿図9～11、写真9・10)

15I地区のI d区のピットS P 01及び周辺からは特異な遺物が出ました。まず素文鏡が2枚、ガラス小玉2個の他に、剣先形鉄製品と呼べるような先端がハの字形になった長さ10cm前後、幅2cm、厚み0.2～0.5cmの鉄器が破片を含めると80個近く出ました。うち30～32の3個はS P 01内から出たし、大半の鉄器はピットを掘り込んだと考えられる平面に集中して出ました。素文鏡もガラス小玉も鉄器群からはややはなれるもの一連の遺物と考えます。素文鏡は研究編でも述べますが、古墳副葬品として多く出土しており、その他では九州・沖ノ島祭祀遺跡や、奈良時代では能登・寺家祭祀遺跡でも出土しています。

また剣先形鉄製品は短冊形鉄製品などとともに祭祀遺跡でよく出土するもので、後の斎事的要素をもつものと考えられます。S P 01がその祭祀の場所であったのか、不用となった祭祀具の棄て場であったかはわかりませんが、集落のそばにある点大いに注目されます。

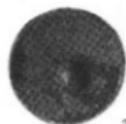


写真9 素文鏡

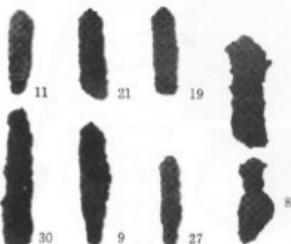
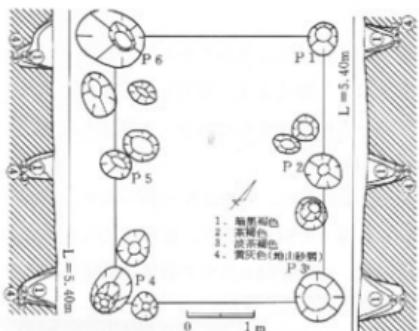
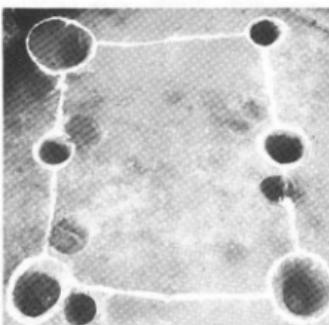


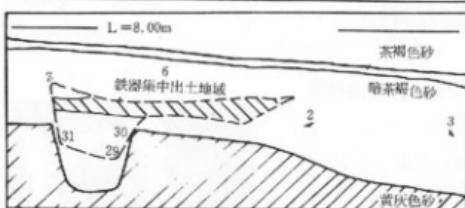
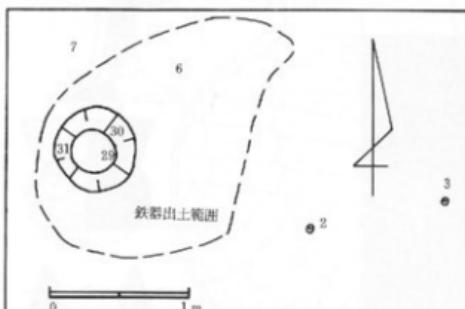
写真10 剑先型鉄製品



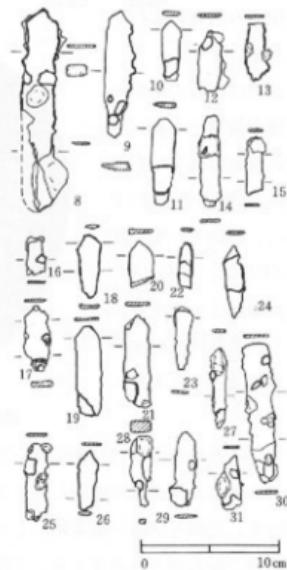
插図8 SB 02遺構図



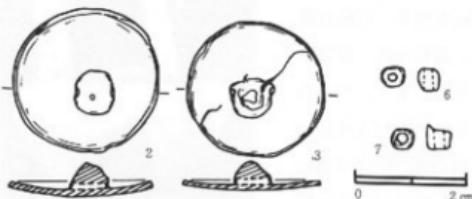
写真II 遺構SB 02



插図9 SP 01遺構図



插図10 SP 01周辺出土鐵器



插図11 SP 01周辺出土鏡・玉

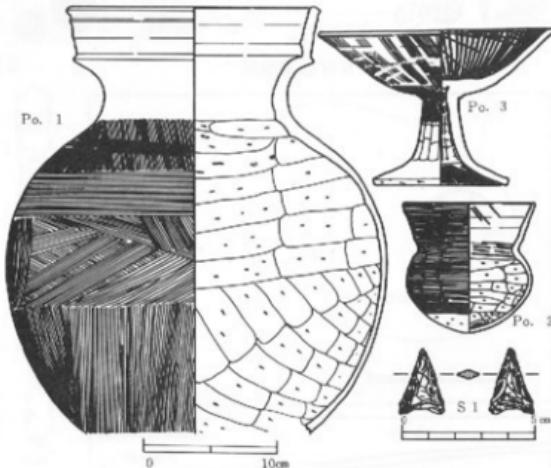
4. 土塚墓・石棺墓・古墳（S X）

長瀬高浜遺跡で確認された古墳は12基でしたが、今年度3基みつかりました。さらに土塚墓は9基、石棺墓7基で、通算するとSXは31まで数えます。調査した古墳は3・4・9・10・22・25号墳と5・24号墳の一部、土塚・石棺墓はそれぞれ9・7基あります。

(1) 土塚墓SX14（挿図12～14、写真13・14）

15J地区の南東端、SI20の南、SI23の北に位置して、主軸はN-30°Wで、平面形は隅丸方形です。上部長軸5.06m、短軸1.35m、深さ0.34mを測り、底部は北へやや傾斜します。やはりプランは隅丸方形で、長軸4.40m、短軸0.64mでやや胴長の溝状に近い形です。中央部よりやや南側にV字状に板石を作っています。枕石を2枚ずつ重ねた枕石を作っています。

遺物は枕石の南側から硬玉製管玉1個、南端の壁面に接して石鎌1個、蓋壙直上で壺（PO1）、南側で小型丸底壺（PO2）、高杯（PO3）を出土。出土遺物より古墳時代前期後半（青木Ⅶ古）と考えられます。



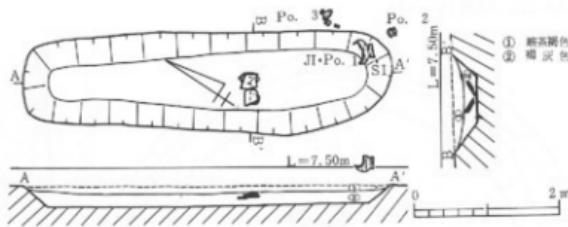
挿図12 SX14遺物図

(2) 石棺墓SX15（挿図15、写真12）

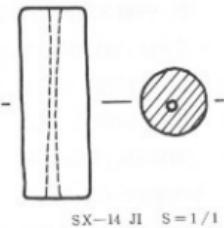
14I地区の北西区に位置し、SX14の南東、SI22の南です。主軸を北西-南東軸にもつ小形の箱式石棺です。墓壙は二段の掘り込みをもち、上段は長軸1.48m、短軸1.46m、下段は長軸1.30m、短軸1.20mを測り、石棺は長軸0.55m、短軸0.23m、深さ0.40mで、蓋石6枚、側壁は北側が2枚、南側が1枚の板石でできています。木口石は東西2枚の他に、西側の側壁外にもう1枚の天井石とも木口石ともわからない石材がある。棺内南東側には薄い板石を組み合わせた枕石がV字状に作られています。棺内に遺物はないが、10号墳等から古墳中期とみられます。



写真12 遺構 SX15



挿図13 SX-14遺構図



SX-14 JI S = 1/1

挿図14 管 玉

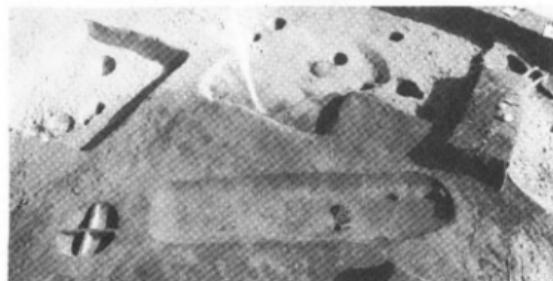
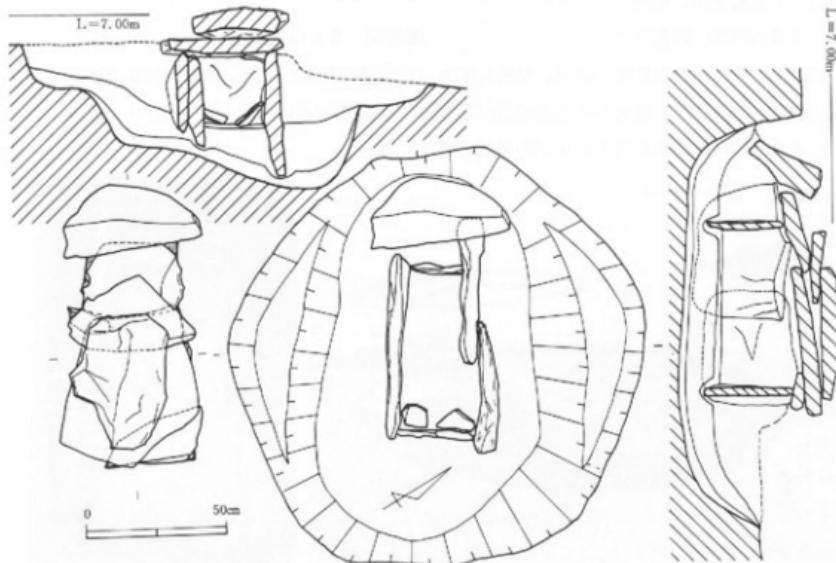


写真13 遺構 SX-14



写真14 SX-14土器



挿図15 石棺墓 SX-15遺構図

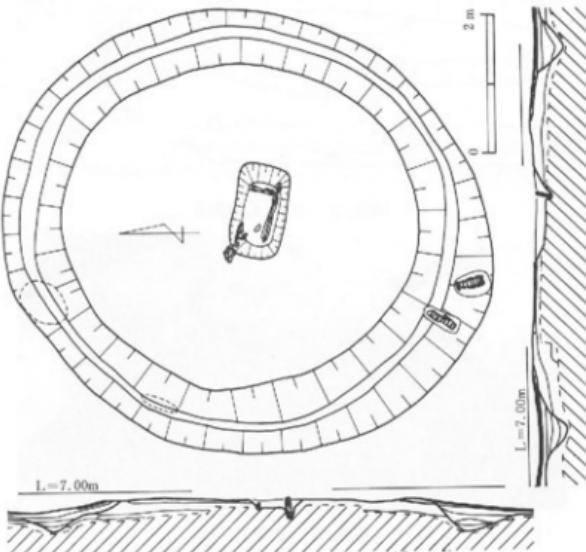
(3) 古墳 S X10 (挿図16~20、写真15~17)

S X10は13地区にあり、S X04の北に接しています。墳形は円形で、径15m、周溝総長17.5m、高さは周溝底から1.4mです。封土は削られて台形でした。周溝は幅2.2m、深さ0.7mで、南西側で合口の円筒埴輪棺を2基検出しました。1基は透し孔や両端を埴輪片でふさぎ、他方は周囲に板石を並べていました。主軸を古墳の中心に向けています。

墳丘内の埋葬施設は石立て木棺墓で、棺内から少量の骨片、鉄錐片

が出てています。規模は長軸3.20m、短軸1.80m、棺部分の長軸1.55m、短軸0.60mです。

遺物は、周溝の西北部分から土師器壺（第20図1）、須恵器蓋杯（同2～7）があり、それよりS X10は古墳時代中期末頃の築造と考えられます。



挿図16 S X10遺構図



写真15 遺構 S X10(西から)

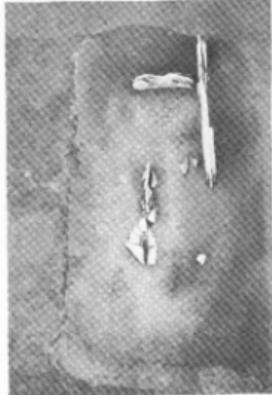
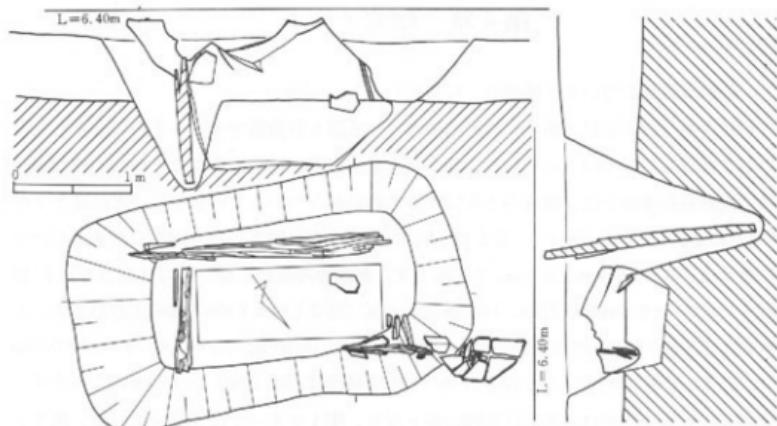
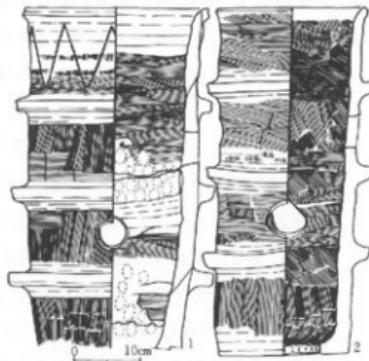


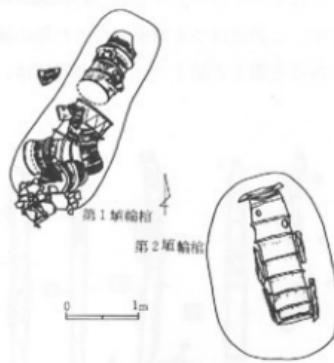
写真16 埋葬施設



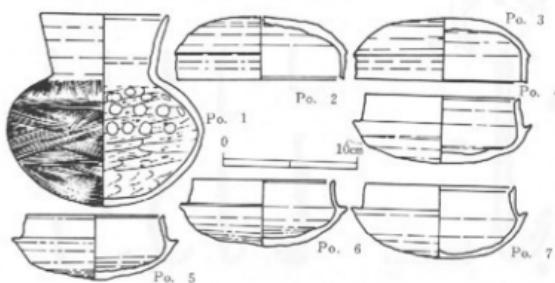
插図17 SX10埋葬施設図



插図18 SX10埴輪図(第1埴輪棺)



插図19 SX10埴輪棺図



插図20 SX10出土土器図

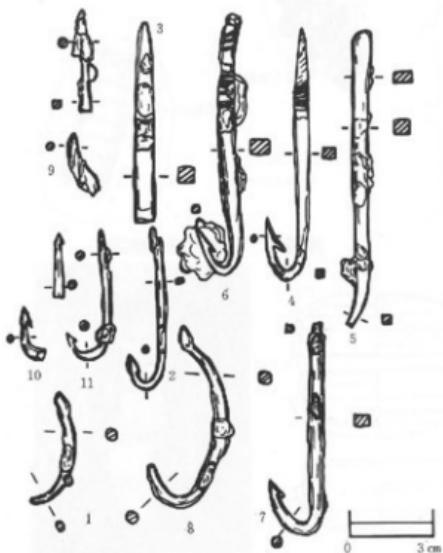


写真17 第1埴輪棺

第4章 研究ノート

I. 釣針状鉄器について（挿図21、写真18）

釣針状鉄器（以下釣針と略す）の出土例は、知る限り27遺跡ですが、そのほとんどが古墳に伴う副葬品として出土しており、岡山県金蔵山古墳、稻荷山古墳などが代表的なものです。長瀬高浜遺跡では、集落内より11本もの釣針がみつかっています。完形品はS I 09（挿図21の2）、S I 12（同6）、S I 13（同4）、S I 69（同7）から出土した4本だけです。長さは5.5cm、9.2cm、9.0cm、7.5cmです。断面をみると、長いものは方形でS I 12（同6）は0.8×0.6cmの長方形、14 I 地区1 a 区（同3）は0.6×0.6cmの正方形です。これに対しS I 54（同8）やS I 47（同1）は円形もしくは楕円形で、0.3×0.5、0.4×0.5cmです。11 I S K01（同10）、10（同2）、39（同11）はほぼ円形で径0.2～0.3cmになります。この断面の大きさの差は必然的に形態の差となり、第1グループは大型で太い針、第2グループはややくの字曲りの細い針、第3グループは小型ながら逆刺の鋭い細身の針にわかれます。この差はつる対象となった魚の種類にもよるでしょうが、豊穴住居跡の土器の形態をみると第1と第2グループの間には、S I 11と41との差にみられる時間差がみられます。



挿図21 長瀬高浜遺跡出土釣針状鉄器実測図

旧砂丘上に立地した長瀬高浜遺跡で、釣針が多く出土したこととは、漁撈も生産手段の一つとしていたことを意味するでしょう。これだけの大きさの釣針は、タイ等を釣ることができたでしょうし、そうすれば比較的しっかりした漁船を高浜の古代人は持ち得たことを推察できるでしょう。（大賀靖浩）



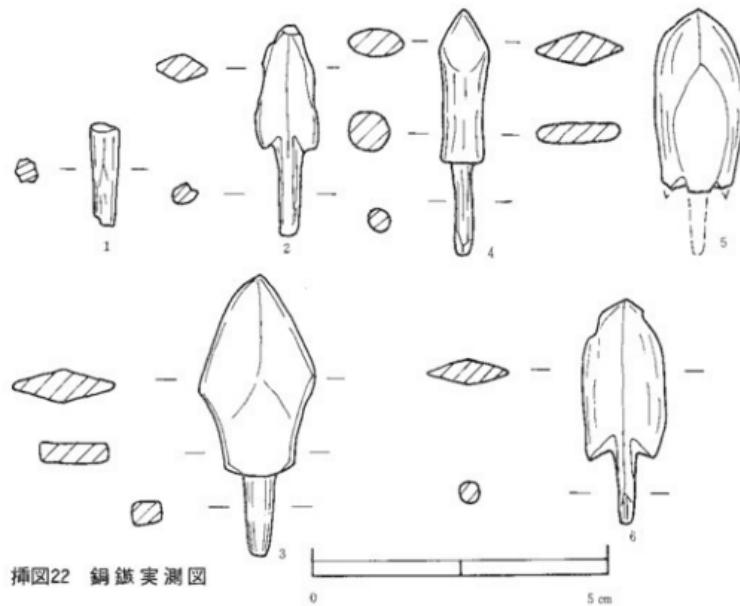
写真18 釣針状鉄器

2. 長瀬高浜遺跡出土の銅鏡（挿図22）

銅鏡は、県下では鳥取市浜坂・鳥取砂丘内で3ヶ所、同中ノ茶屋・湖山砂丘内で1ヶ所、米子市彦名・弓ヶ浜砂洲上でも出土しています。砂丘地以外では東伯町伊勢野で出土しています。島根県江津市の波来浜遺跡でも銅鏡が出土しており、砂丘地から多くの銅鏡が出土することは山陰の考古学界の謎の一つでした。ところが長瀬高浜遺跡から75棟もの竪穴住居跡が出土し、銅鏡をともなう住居がみつかったことは、波来浜遺跡の墳墓とともに砂丘下に集落のあったことを推察させることになりました。

長瀬高浜遺跡では、6本の銅鏡が出土しました。S I 04直上の黒褐色砂中から2個（挿図22の1・6）、S I 07から1個（同3）、S X04の周溝内から1個（同5）、12F地区から1個（同2）及び13F地区から1個（同4）出土しています。2・5・6は有茎で逆刃をもつ断面菱形で弥生時代のものと考えられます。これに対し3・4は、3が扁平で断面長方形になるに対し、4は丸いノミ頭状です。茎部のみの1も4に近い形態です。これらは古墳の副葬品にみられる銅鏡に近く、大阪府富田林市廿山古墳、同八尾市西の山古墳出土のものに似ています。のことからも古墳時代前期のものと考えられます。

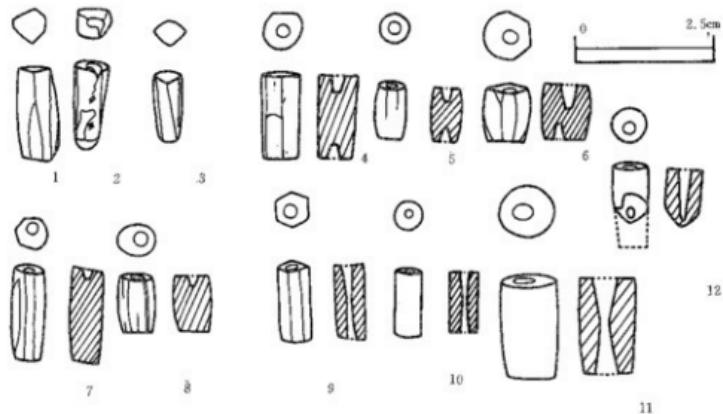
銅鏡はその用途が実用でなく祭器と考えられている点、集落出土の銅鏡にも同じ性格があてはまると考えられます。
（大賀靖浩）



挿図22 銅鏡実測図

3. 玉作遺跡としての長瀬高浜遺跡（挿図23、写真19）

長瀬高浜遺跡出土の玉の未製品は、8個出土しています。1号墳周辺で、未孔のもの（23図1・2・3のように穴をあける前のもの）が3点、未貫通のもの（同4・5・6のように穴が通っていないもの）が3点、住居跡内から未貫通のもの（同7・8）が2点出土しています。すべて緑色凝灰岩製の軟かい石です。同岩以外の未製品は、まったく見られません。また、当遺跡内からは、同岩製の完成品（同9・10・11・12）も出土しております。古代人が、どのようにして玉をつくったか、はっきりはわかりませんが、出雲・玉作（註1）では、次のようにつくられていました。①原石の採集。②原石を割って、長方形の石材をつくる。③研磨—長辺を、おおざっぱに面取りし、短辺（小口部分）を磨いて、平坦にする（金剛砂の使用）。④穿孔一穴をあける（一方の方より）。⑤仕上げ（木砥）磨き。⑥完成。当遺跡における未製品については、第①段階の原石は、少量出土していますが、第②段階の未製品は、出土していないくて、第③段階のみの未製品が、出土しております。第④段階の穿孔について、出雲・玉作遺跡でみられる玉は、すべてといついくらい片方より穴があけられています。しかし、当遺跡においては、23図4・5・6に見られるように、両方の面より穿孔されています。両方から穿孔するものとして、北陸の片山津遺跡（註2）において、緑色凝灰岩製の管玉の未製品が、出土しています。出雲・玉作遺跡の場合、主にめのうを主原料としているため、材料の違いにより、技術が違ってくるのではないかでしょうか。当遺跡の玉の穿孔は、金属属性のキリ状のもので、回転を利用してあけられたものと思われます。開孔後は、長辺を磨き、円筒状に全体を仕上げたものでしょう。磨いた後、溝状にくぼむ、いわゆる、玉砥石と呼ばれる砥石が、出雲・玉作遺跡でみ



挿図23 管玉未製品等実測図

られますか、当遺跡においては、まだみられません。緑色凝灰岩は、軟かいもので、比較的容易にとげた事があげられます。その他にも、出雲・玉作遺跡のように、専業で玉を作っていたものではなく、自給的なもの、つまり家内工業であったため、他に出土している普通の砥石を、兼用していたのかもしれません。玉の大きさについては、管玉の場合、古くなればなるほど、小さくなるそうです。そこで、安来市の仲仙寺古墳で出土した、管玉の大きさにはほぼ似ておりますが、ややその時代より新しいものと思われます。

このように、長瀬高浜遺跡で作りかけの、玉が出土している点から考えて、玉をつくっていた工房があったのではないかと思われます。工房といっても、先に述べたごとく、専業が行なわれたものではなく、自給的な家内工業的なものであったと思われます。他にも、鳥取県内における、玉作遺跡の可能性があるものとして、鳥取市浜坂、西伯郡中山町の細工塚の2つがあります。(註3)

註1. 出雲・玉作資料館の勝部衛氏に御教授いただいた。

註2. 加賀玉造遺跡の研究。加賀市。

註3. 鳥取県史蹟調査報告I。大正11年。梅原末治。

(津川ひとみ)

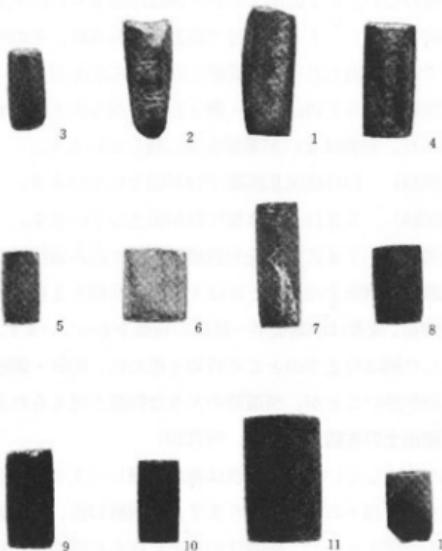


写真19 管玉未製品

4. 長瀬高浜遺跡出土の鉄鎌について（挿図24）

鉄鎌は、古墳、竪穴住居跡、黒砂内から多く出土しています。出土地別にあげます。

1号墳及びその周辺（第24図1～7） 1～5は、剣や刀を出土した12号棺の内外から出土、6本とみられたが接合し5本となりました。6・7は周辺で出土しています。

3号墳 墳丘中央部や第1埋葬施設内で数個の茎部がみられます。

4号墳（同図8） 墳丘B区の板石集中地区の西側で、鉗、刀子、斧とともに8と茎部3片が出土しています。

5号墳（同図9） 周溝内西側で9が出土しています。

10号墳（同図10） 埋葬施設内から13点もの茎片が出土しており、10のように樹皮でまいたり布で包んだ痕跡がみられます。墳丘C区や円筒埴輪棺附近からも茎片が少量出土。

12J地区（同図11～13） S I 02の土器群下から大型鎌の12が、それより下層から鉗とともに13が出土し、小形砥石もみられます。S I 04の土器群内でのみ頭状鎌11がみられます。

11J地区（同図14） S I 03からのみ頭状鎌14や茎片が出土しています。

12I地区（同図15～18） S I 12内で出土した15は平根式の鎌で、S I 05出土の16は小形で鎌かどうか疑わしい。S I 07出土の17・18は床面よりだいぶ上層で発見されました。

14J地区（同図19～21） I a区附近で鉄器群がみられ、その中に大形鎌の19～21がありました。附近で10号墳出土の須恵器蓋杯と同じものが出土しています。

15J地区（同図22） S I 19は砥石・磨き石が7点も出土しており、他の鉄器とともに22がみつかりました。逆刺はないが茎部を少し残しています。

13G地区（同図23） 13G地区北西部で23が出土しています。

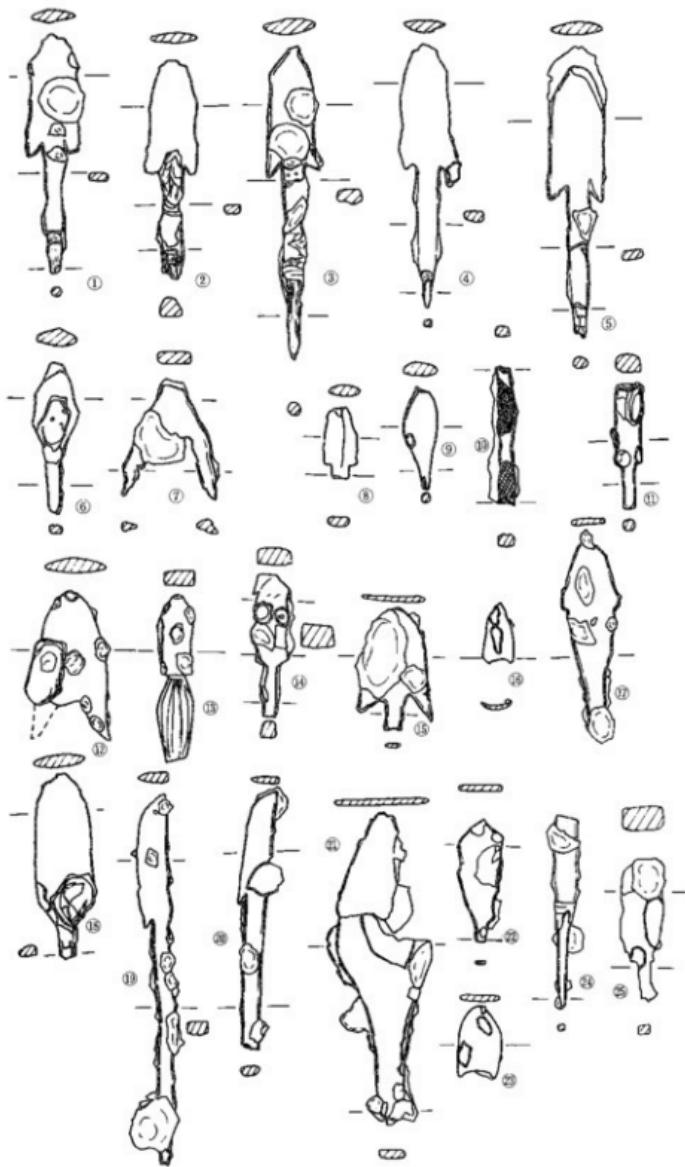
14I地区（同図24） S X14から茎部片24が出土しています。

15I地区（同図25） I d区で剣先形鉄器に混ってのみ頭状鎌25が出土しています。住居跡出土の鉄鎌と古墳出土の鉄鎌とは大きさ、形態ともに大いに異なり、前者は古墳時代前期末～中期初、後者は中期後半～後期の特徴をもっています。特にのみ頭状鎌が堅穴住居跡から出土した例は今までのところ皆無と思われ、釣針・銅鎌などと共に古墳副葬品と考えられるものが多いことが、当遺跡の大きな特徴と考えられます。（近藤 滋）

5. 長瀬高浜遺跡出土の古銭（挿図25、写真20）

現在18枚の古銭が出土しています。1枚は鋳出が著しく文字の解読が不可能でした。17枚について種類別すると以下になります。中国銭13枚、日本銭4枚です。

「開元通宝」（第25図1～3） 唐時代の初めに作られ長期にわたって鑄造されている。3枚とも裏面に文様・文字等が認められず、いずれの時期のものか明らかではない。ただ文字が右回りに開元通宝とあるので、初鑄の開元通以後の改鑄されたものでしょう。1



挿図24 長瀬高浜遺跡出土鉄鎌図



は後述の「景德元宝」とともに37号火葬墓出土のものです。2は出土地不明、3は13E地区Ⅲd区の第2層の明褐色砂から出土したものです。

「景德元宝」（同図4） 北宋時代の真宗年間（1004年）に初鋤されたものです。4は1とともに37号火葬墓から出土したもので、火葬墓の副葬品として数少ない遺物です。

「至和通宝」？（同図5） 北宋時代の仁宗年間（1054年）に鋤造された至和通宝かとみられます。13F地区ⅢC区の第2層の明褐色砂中から出土しています。

「嘉祐元宝」（同図6） 北宋時代の仁宗年間（1056年）に初鋤されたもので、出土地点は不明です。

「熙寧元宝」（同図7・8） 北宋時代の神宗年間（1068年）に初鋤されたものです。7は4号墳周溝内側で出土、8は12D地区I d区で出土しています。

「元豐通宝」（同図9） 北宋時代の神宗年間（1078年）に初鋤されたものです。13E地区Ⅲd区の第2層明褐色砂上面より出土しています。

「大觀通宝」（同図10） 北宋時代の徽宗年間（1111年）に初鋤されたものです。出土地は不明で、遺跡地内採集品です。

「政和通宝」（同図11・12） 北宋時代の徽宗年間（1111年）に初鋤されたものです。11は13E地区Ⅲd区で、明褐色砂層中から出土しています。行書体の字体です。12は2号墳の南側、16E地区の黒砂直上から採集されたものです。楷書体の字体です。右上、左下の両端をカットしており、通貨以外の用途にも使われたと思われます。

「皇宋通宝」？（同図13） 字体は皇宋通宝と読めるが、中国に皇宋のつく年代はない。21F地区附近の黒砂直上面で表採されています。

「貞觀永寶」（同図14） 清和天皇の貞觀12年1月（870年）に初鋤されたもので、和銅開宝から数えて9番目に作られた皇朝12銭の一枚です。鋤造悪く粗悪ではほとんど通用しなかったらしいが、14はしっかりしています。13B地区の東南側の明褐色砂層中から出土。

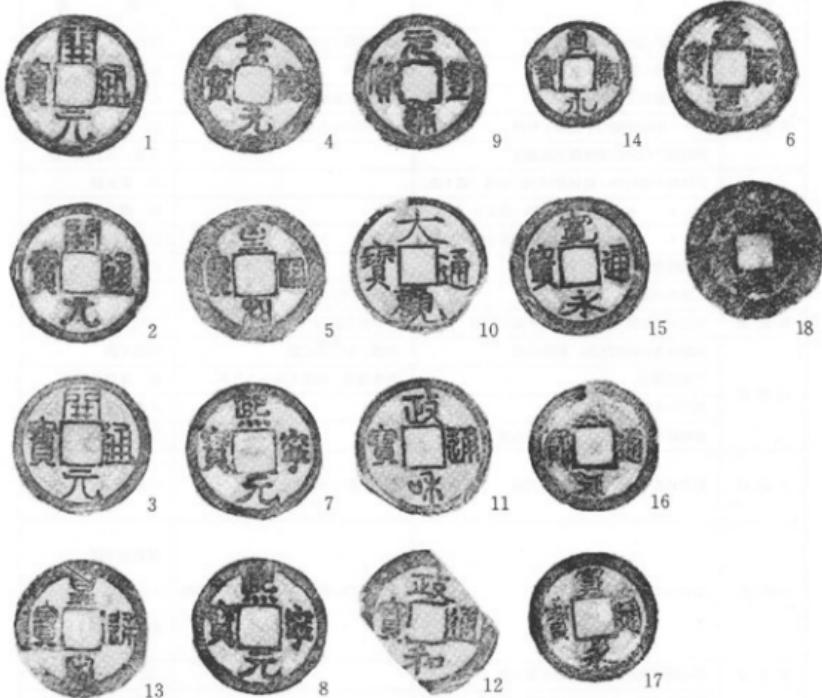
「寛永通宝」（同図15～17） 江戸幕府の寛永13年（1636年）に初鋤されている。鋤造した年代にかかわらず寛永通宝と呼ばれ、一文銭と四文銭（裏に波の文様があり、通称波銭という）がある。15は1号墳北東から表採、16は11D地区附近から出土したもので、17は東側の新砂丘上で表採しています。長瀬高浜出土のものは全て一文銭です。

「一」18 銀出が著しく解説が不可能、12E地区Ⅱb～c間ベルトの明褐色砂中出土。

以上、出土した古銭を概観しましたが、中国銭は唐銭と思われる1種3枚、北宋銭7種9枚です。11世紀中頃のもので、これらの出土する第2層明褐色砂の上限はそのころとみられます。また、古銭の出土地がEラインより南側に集中しており、古墳時代以後の遺物・遺構が多い地区でもある。また火葬墓や土壙内に屈葬人骨を収めた土壙墓も7基みられ、山陰で焼かれたとみられる陶質骨蔵器もあることから、Eラインより南は新しい墓地とし

て使用されていたと思われます。これらが明褐色砂層直上の白砂層から掘り込まれている点、第2層明褐色砂層の下限は中世末と考えられます。

(中村 徹)



挿図25 古銭拓影図



1	4	9	14
2	5	10	15
3	7	11	16
13	8	12	17

写真20 長瀬高浜遺跡出土古銭

6. 長瀬高浜遺跡出土の小形素文鏡（挿図26、表1）

表一 素文

県	地名	主体	鏡種
長崎県	壱岐郡芦辺町深江原の辻	弥生遺構、包含層	弥生、仿、素文鏡
	下原郡豊玉町仁位東浜	箱式石棺	弥生、仿素文鏡
佐賀県	唐津市鏡東字木さこがしら	8号支石墓横口式小形多穴	仿、無文鏡
	柏崎長崎山小長崎1号墳	円墳竪穴小石室	仿、無文鏡
	神崎郡千代田町柴尾橋下流遺構		弥生、仿、無文鏡
福岡県	宗象郡大島村神ノ島16号(岩陰)遺構(第1次)		仿、素文鏡
	タタタ 18号遺跡(推定)	岩上	仿、素文體鏡
	タタタ 21号遺跡(第3次)	岩上	仿素文鏡
山口県	豊浦郡豊北町神田土井ヶ浜		仿素文鏡
広島県	広島市高陽町中田2号墳	円墳、竪穴式石室	仿素文鏡
鳥取県	鳥取市古郡家上ノ山郡家1号墳3号棺	90m前方後円、粘土桟	仿素文鏡
兵庫県	神崎郡香寺町相坂柏、相坂古墳	円墳、竪穴式石室	仿素文鏡
	下板郡鷺手	弥生遺構、地表下50cmより下	越、重圓素文鏡
	神戸市大歳山		仿素文鏡
	城崎郡日高町鶴岡太田谷の一古墳		仿素文鏡(方格塙か)
大阪府	堺市百舌鳥赤塚カトンボ山古墳	円墳、粘土桟あり	仿無文鏡
和歌山県	和歌山市大谷 大谷古墳	前方後円、家形、石棺、長持形石棺	無鉛素文鏡
			鉛付素文鏡
滋賀県	野州郡東町川辺安養寺大塚古墳		仿、小形素文鏡
奈良県	桜井市三輪 山の神祭祀遺跡		仿素文小鏡
	タ 安倍 安倍寺跡		仿素文鏡
岐阜県	下波郡垂井町西代西野		
静岡県	静岡市谷田下中林古墳(2号)	径14.2高1.0の円墳、横穴式石室	
	熱海市上多賀 宮脇祭社遺跡		4面
	賀茂郡下田町 佐田祭社遺跡		
東京都	八王子市津木向原4区5号住居址	(弥生)整穴住居址(前野町)	仿素文鏡
栃木県	宇都宮市江曽島雷龜山古墳	前方後円墳	素文鏡
群馬県	高崎市若田町大塚古墳		素文鏡
石川県	加賀市巣山町高座西山第3号墳	墳丘不明木棺	仿素文鏡
	羽咋市寺家遺跡	第Ⅱ期(s C)祭祀遺跡	素文鏡
長野県	長野市篠ノ井川柳将軍塚古墳	前方後円墳、竪穴式石室	仿素文鏡
	飯田市川路殿付1号墳	円墳	仿素文鏡
福島県	国見町塚野日古墳群八幡冢古墳		素文鏡

鏡出土地名表

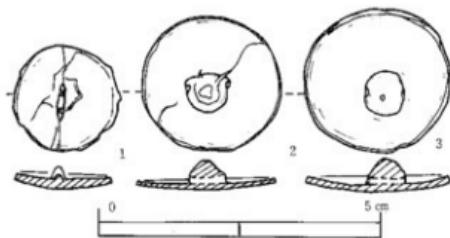
(参考文献一「日本における古鏡出土地名表」他)

径	機	考
7.7cm	他にこうもり座鏡片あり	
	鉄劍1、縦形鉄劍2、半球形飾金具	
	滑石製小白玉、ガラス小玉 計2,500	
小形	碧玉製丁字頭2、碧玉管玉数個、ガラス小玉40、刀子	
4.2cm		
3.0cm	(17) 三角縁三神三獸鏡(20.5)、鉄利器、玉類、石劍、その他多数	
3.9cm~3.5cm	(17) 六獸連弧文鏡(10.0)、(17) 四乳樹唐文鏡(7.9)、勾玉61、管玉201、白玉1、車輪石1、石劍5 船鏡2(いづれも17.6)、彷彿6(8.5~13.1)	
6.5cm	古式土師器、弦文鏡(7.7)	
	短甲、劍、刀、鎌、鎌	
8.5cm	劍、短甲、鎌、櫛、土師器	
8.3cm	刀、鎌、(17) 内行花文鏡(12.6)	
3.8cm		
	石鏡	
3.2cm	柳葉文鏡3.5、切子玉、銀燐	
4.5cm	滑石製品及び同模造品(子持勾玉4、勾玉725、斧頭6、鏡13、刀子360、蟲形1、円板1、白玉約24)、 鉄製品(刀約4口分、劍約7口分、鉢身1口分、鎌20、刀子4、矛頭(大)34、斧頭(小)23、蜘蛛形鉄器 2)、位至三公鏡(船8.1、白鏡鏡)	
2.6cm 4面		
3.1cm 2面		
3.4cm 3面		
5.5cm 1面	玉類、垂飾付耳飾、無金具、馬具、背、短甲、桂甲、武器	
6.0cm 1面		
2.8cm 3面		
9.3cm	二神二獸鏡、勾玉、管玉、巴形銅器、琴柱形石製品	
3.0cm	子持勾玉、石製模造器具、土製模造器具、土師器、須恵器	
4.5cm		
6.6cm~6.9cm	不明	
	須恵器、馬具、鎌、玉類、金環	
3.5cmと5.2cm		
4.3cm		
6.0cm		
4.4cm	石製品、土器、鎌3	
	石製模造品、刀、馬具	
10.0cm	刀、劍、鎌、權、衡角付背、短甲	
2面	後掘鏡、鉄製儀鏡、帶金具3、銅鏡片、琰塔3、和銅開志2、萬年通宝、用途不明青銅製品多数、△ニ △ニア鉄製品多数、奈良三彩小壺片3、土器多数	
3.1cm		
4.2cm	四獸鏡(10.6)、管玉4、須恵器	
	石製模造鏡、櫛、鎌	

小型素文鏡は3面出土しています。1面（第26図1）が13E地区II d区の土器群内出土で、S I 60附近出土です。直徑1.9cm、厚さ0.6cmで、中央に半円板状の鉢がつき、鉢から両端へは鋸上りの際にいたとみられる鋸型の接合部が残っています。あの2面は15I地区S P01附近出土で、祭祀遺跡の頂でのべたとおりで、同2は径2.4cm、厚み0.2cm、同3は径2.5cm、厚み0.2cmで、半円球状の鉢がつきます。3面とも表面は研磨され光沢をもち、凸面鏡としての形態を備えています。色調はブロンズ独特の青銅錫色です。県下には現在のところ小型素文鏡の出土は他ではみられません。さて、表1でみられるように、全国では知る限り素文鏡と思われるものは約50例です。その出土地は古墳、集落、祭祀遺跡等がありますが、古墳出土の素文鏡はほとんどが他の大・中型鏡とともに出土しており、小型素文鏡のみの例は祭祀遺跡に多いところです。1にみられる扁平鉢は奈良県三輪山遺跡出土のものと共通し、三輪山遺跡や大阪府・カトンボ山古墳では古墳時代中～後期とみられる時期の遺物として子持勾玉が数個出土しています。子持勾玉は高浜では出土していませんが、東郷池をはさんだ東郷町高辻では国の重要文化財とされる連続の子持勾玉があり、山陰沿岸には多くの子持勾玉がみられる点、三輪山遺跡、カトンボ山古墳の祭祀遺物のセット関係（必ずしも同一地点出土とはいわない）が山陰でもみられるところです。また和歌山県大谷古墳、福岡県沖ノ島遺跡出土例では大陸的要素の濃い遺物を出土しており、長瀬高浜遺跡の古墳時代前・中期の時代的位置も考えねばならないと思われます。

奈良時代以後では石川県寺家遺跡や福井県松原客館跡遺跡で、新しい小型素文鏡並びに小型鉄鏡がみられるが、これらを使った祭祀の形態が古墳時代の形態を引きつぐものかどうかは今後の問題点でしょう。ただ同じ日本海沿岸の砂丘地に遺跡が立地する共通点から、海への祭祀の用具のつながりを考えるべきでしょうか。

（近藤 滋）



挿図26 長瀬高浜遺跡出土小型素文鏡

第5章 まとめ

長瀬高浜遺跡の昭和54年度の発掘調査は、約10,000m²について行った。その結果、調査した遺構は、竪穴住居跡75棟、獨立柱建物跡10棟、方形周溝遺構2、井戸状遺構4、溝状遺構5、祭祀遺跡1、古墳8基、石棺墓7基、土壙墓9基、火葬墓15基、屈葬墓7基、五輪8個、骨蔵器1基等です。この遺構群は時代的には弥生時代前期～古墳時代前・中・後期～室町時代から江戸時代初期に及びます。これらの遺構は調査後すべて削られてしまい今は何も残っていないが、古墳時代前～中期の集落、中～後期の古墳・墳墓、室町～江戸初期の庶民の墳墓と3段階にわたって遺跡の盛期があったとみられます。この他に弥生時代前期の集落も存在していたことが推察できます。次に出土遺物としては、土器（縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、中世陶磁器、土師質土器など）をはじめとして、鉄器、銅器、石器、玉類が多量に出土しています。また、古墳、石棺墓からは人骨が比較的残り良く出土しており、黒砂層からは馬歿も出土しています。自然遺物としては、炭化木（木炭）、種子の他、炭化米もみられます。本概報には銅鏡、釣針、鉄鏡、素文鏡、銅錢、管玉未製品についての研究ノートを掲載したが、これらは執筆者が今後も研究を続けてゆくための序章になるものであることは、自他ともに認めるところです。

今後も続く長瀬高浜遺跡の発掘調査の第3回目のまとめとして、本書がこの遺跡の理解のためにほんの少しでも役立てば幸いかと思います。

調査関係者名簿

財団法人鳥取県教育文化財団

常務理事 木村 耕造

事務局長 春田 明

調査員 田中精大、影山和雅、西村彰滋、中村 徹、門脇豊文、近藤 澤、
筒尾千恵子、津川ひとみ

調査補助員 大賀靖浩

調査指導 羽合町文化財保護委員長 国田一夫

県教委文化課 森田純一、田中秀明、清水真一

羽合町中央公民館 安達幸範

協力 鳥取県教育委員会、羽合町教育委員会、羽合町中央公民館、鳥取県土木部下水道課、倉吉土木出張所下水道課、日本下水道事業団大神川出張所、熊谷組、西松建設、浅野建設、大島土建、保存科学研究会

54年度調査従事者

赤石二郎、足立政代、安達芳男、新 静枝、新 幸義、天野正一、池田秀己、
石井末野、石賀智子、猪田瑞栄、稻坂梅野、稻坂進吾、今市加代子、今市次郎、
入川泰樹、岩本鶴代、梅田文子、大場 茂、大畑誠一、岡崎正紀、岡本 稔、
尾島一郎、尾高千代野、尾高豊野、尾谷梅野、勝田繁行、上本治子、河田 稔、
神崎さえ子、北田敏宏、北田美由貴、木村広志、木村良男、木下有二、久葉玲子、
駒下満枝、酒井静江、桜井尚代、佐々木良枝、重松敏夫、闇 俊郎、高田
正彦、高橋絹子、高橋洋子、高浜とし子、田熊 免、竹内啓子、丹波千代子、
付城彦一、徳岡 洋、徳島令子、徳田益己、戸崎明美、富盛みさと、中島和宏、
中条幹夫、中本聖治、中村登志子、西崎早苗、西原信男、西原洋幸、野津誠治、
浜口幸吉、浜口みち子、浜本百合子、林 志郎、原田佳幸、平田勝彦、福島智
恵子、福嶋慶純、福嶋法爾、福光 洋、藤田広子、堀内幸子、前田朋子、増井
藤吉、増井保夫、増田裕司、光井康代、光井芳子、三沢きよ子、三沢孝志、村
川裕紀、村口いつ子、村口静枝、森田とし子、山下晴彦、山田利枝、山田宣彰、
山根央也、山本久美子、柿垣継仁、吉田清昭、吉村綾子、米沢真一、若狭喜代
治

長瀬高浜遺跡Ⅲ

天神川流域下水道事業にともなう

砂丘遺跡の発掘調査概報(2)

発行日 1980・3・31

発行者 財団法人鳥取県教育文化財団

〒680 鳥取市扇町21

鳥取県社会教育福祉会館内

TEL (0857)27-5252(代表)

印 刷 勝美印刷株式会社鳥取支店
鳥取県東伯郡羽合町長瀬